

ぼくのおとうさんはコックさん

「おとうさん、おはよう。いっしょにあそぼう。」

「きょうもしごとなんだ。」

「にちようびなのに？」

「まえも、おなじことっていた・・・・。」

「ごめんな。またこんどあそぼうな。」

さとるは、がっかりしてひとりでこうえんにあそびにいきました。

ともだちは、たのしそうにおとうさんとサッカーをしてあそんでいます。

ひとりぼっちでいると、

「さとるくん、ぼくたちといっしょにサッカーしてあそぼう。」

ともだちのだいきくんがさそっ

てくれました。

「あそばない。」

さとるは、ことわってしまいました。(ぼくのおとうさんは、どうしておしごとなのかな。ともだちのおとうさんは、おやすみなのに。) ころころのなかがモヤモヤしたままいえにかえりました。

「さとる、しょんぼりしたか
おしてどうしたの？」

と、おかあさんがききました。

「どうして、おとうさんは、



おしごとなの。いつもあそんでくれないの。」

さとるはじぶんのきもちをおかあさんにつたえました。

「おとうさんは、みんなのためにいっしょうけんめいおしごとしているのよ。

おとうさんも、きっとさとるとあそびたいのよ。」

おかあさんがはなしました。

「さとる、おかあさんとサッカーしてあそぼう。」

「もういいよ。」

さとるはひとりじぶんのへやにはいってしまいました。

なんだかさびしくなってきた、なみだがでてきました。(ぼくとあそんでくれないおとうさんは、きらいだ。ぼくをほっといてなにをしているんだろう。)

とかんがえていると、

「さとるくん、どうしてないているの。」

どこからかこえがしました。

「きみは、だあれ。」

「ぼくは、フライパンのアニー。おとうさんは、まいにちぼくをつかっておいしいりょうりをつくっているんだよ。」

「ほんとうなの。」

「じゃ、おとうさんのレストランにいつてみようか。」

「えっ、いつてもいいの。うれしいな。」

フライパンのアニーのまほうで、おとうさんのレストランにつれていつてもらいました。



「おきやくさんがおいしそうにたべているね。」

「あっ、おとうさんがしんけんなかおでりょうりをつくっているんだ。」

「おとうさんは、まっかなかおをしてフライパンをじょうずにかえしている。」

「おおつぶのあせをかいて、あついのにがんばっているんだ。」

「おとうさんてすごいな。」

さとるは、うれしいきもちになっていえにかえってきました。

へやからでてきて、ニコニコしていると、

「さとる、なにかいいことあったの。」

おかあさんがききました。

「おとうさんはすごいね。おいしいりょうりをいっぱい作るんだね。」

「どうしてしているの。」

「なんでもないよ。ひみつなんだよ。」

さとるはうれしそうにいいました。

すうじつご、さとるは、おかあさんといっしょにおとうさんのレストランにいきました。

おとうさんは、さとるのかおをみて

「よくきたね。」

と、ほほえみました。

「さとる、おとうさんがつくったスパゲティーだよ。」

「おいしそうだな。いただきます。」

といって、はじめておとうさんがつくってくれたりょうりをたべました。

「おかあさん、おいしいね。おとうさんのつくったりょうりは、せかいいちだね。」

と、おかあさんとよろこびました。そして、こころのなかでいままでじぶん

のことばかりかんがえていたことがはずかしくなりました。そのとき、おとうさんがもっているフライパンがにっこりとわらうと、さとるもえがおになりました。

やすみのひ、

「さとる、いっしょに
サッカーしようか。」

「ううん。きょうは、ぼくもおとうさんみたいにフライパンでなにかつくってみたい。」

「じゃ、ホットケーキつくろう。」

かぞくみんなでざいりょうをそろえたり、やいたりしました。

（つくるってたのしいな。

おおきくなったら、おとうさんみたいなコックさんになりたいなあ。） さとるは、ゆめをおおきくふくらませました。

